

広島を訪れて

港中学校 代表者

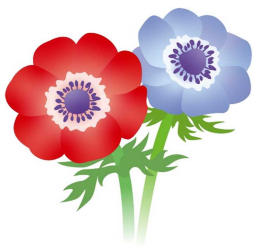
私は八月五日、六日に港中学校の生徒代表として、七十九年前に原子爆弾を投下された広島市へ平和について学びに行きました。平和記念公園と広島国際会議場を訪れ、戦争の悲惨さ、そして命の尊さについて学びました。

一日目に三重県を出発し、広島市に着くと平和記念公園に向かいました。慰霊碑を見学し、全校生徒で折った千羽鶴を原爆の子の像に献納しました。そのあと、原爆ドームを見学し、平和記念資料館にて被爆証言講話を一時間程聴きました。私の印象に強く残っている場所は原爆ドームです。今まで社会の授業やテレビの特集で、写真や動画で何度も見たことがありましたが、実際に見るのは初めてでした。原爆の子の像あたりから見えた原爆ドームの上部は、空洞が目立ち、ボロボロに見えました。実際に近くで見るとあらゆる所にひびが入っており、いつ崩れてもおかしくないほど壊れていました。原爆がもつ破壊力の凄さと恐ろしさが表れていたと思います。そんな残骸を目の当たりにし、言葉では言い表せない感情になりました。そんな原爆ドームをよく見てみると、中には倒壊を防ぐための黒い柱が沢山ありました。戦争や原爆の恐ろしさを後世に残そうとする、先人たちのメッセージがそこにはあるように私は感じました。爆心地から僅か百六十メ

ートルという至近距離にあったため全焼したにも関わらず、当時の建物が今でもしっかり保たれていました。この建物から、当時を想像し考えることが戦争を知らない現代の私たちにとって重要なことだと思えます。この建物を見るだけでも戦争の悲惨さが目に浮かび、とても印象に残りました。

そのあとは被爆者による講話を聴き、今と戦争当時の価値観の違いや、どれだけ今が平和に暮らせているかを改めて知るきっかけとなりました。本当に沢山のことを学び、色々なことを見つめ直す一日となりました。

二日目、平和記念式典に参加するため、七時過ぎには平和記念公園に移動しました。平和記念公園は多くの人々であふれていました。入口ではテロ対策のため、一人ずつ手荷物検査が行われ、飲み物はガソリンなど危ない液体でないことを確認するためその場で一口飲む、ということを行ってから入場しました。平和のための式典にも関わらず、暴力的な行為が起こる可能性がある現実にも、もやもやした気持ちになりました。原爆死没者名簿奉納から始まり、八時十五分に一分間黙祷をし、平和の鐘が鳴り響きました。そのあと、平和宣言、平和への誓い、平和の歌の合唱が行われました。そうして平和記念式典は終わりました。



広島を語る

港中学校 代表者

私は八月五日と六日の二日間、広島へ行き平和の尊さや、命の大切さ、戦争の悲惨さを肌で感じ、過去の日本で起きた出来事を学んできました。今まで学んできた平和学習から、戦争や平和について関心があり、広島へ行って更に理解を深めることができました。実際に現地へ行って、話を聴いてみないと分からないことも多く、自分たち、ピースメッセンジャーの役割の重要さに気づきました。

広島といえは原爆ドームという印象をもつ人が多いと思いますが、たくさんの方が知っているのはドーム型の建物が綺麗に残っている写真だと思います。しかし、近くへ行ってじっくり見てみると、当時の悲惨さを物語るように、壁は欠けてひびが入っていました。また、内側は鉄骨によって支えられていることに気がつきました。後日調べてみると、何度か補強工事が行われていることを知り、被爆者の方が減少する中、原爆ドームが代わりに「核兵器廃絶」と「世界の恒久平和」を訴えているのだと思いました。私が二日間で特に印象に残っていることは切明千枝子さんの被爆証言講話です。私が代表してお礼の言葉を言う担当だったので、「どんな言葉を言おうかな」、「上手く話をまとめられるかな」と、とても不安に思っていました。しかし、お話を聴いてみると第二

次世界大戦のことだけでなく、当時の日本の様子や世界の動き、広島島の地形など、心が痛くなるほど、丁寧に分かりやすく教えてくださいました。先程の不安なんてすぐに吹き飛んで、話に夢中になりました。切明さんが最後に皆さんへのお願いとして「心の中で戦争で亡くなった人たちと共に生きてあげてください。そうするだけでその人たちは報われると思います。」とおっしゃってました。この言葉が胸に響きました。私は平和について自分ができることを考えて行動したり、学んだことを周りの人に伝えたり、行動に移したりすることが亡くなった人たちにとって私たちができることだと思っていました。間違いではないと思いますが、今私たちが平和な暮らしができてきているのは今までの日本の歴史があったからだと思い、日々感謝することも平和に繋がるのだと分かりました。

私は、「平和」とは何かを考え直すことができました。被爆した人は私たちと同じように過ごしていた当たり前の日常が一瞬にして奪われ、地獄と言われる程、街並みも身体も何もかも変わり果ててしまいました。何もなければ、明日も生きていた人たちの罪なき命も奪われ、戦争が終わった今も後遺症に苦しめられている人もいます。私たちにできることは、こうした明日を生きたくても生きることができなかった人たちがたくさんいることを理解して、毎日に感謝することだと思いました。今回実際に広島に行き、学んだことを今後活かしていけるようにしたいです。

原子爆弾が奪うもの

城田中学校 代表者

被爆された方のお話を聴かせていただき、原子爆弾は私が思っていた何倍も悲惨なものだったと気づきました。栄えていた広島町の町が一つの原子爆弾によって一瞬で破壊され、普通に暮らしていた人々の命や生活、幸せが突然奪われたと聴き、原子爆弾の恐ろしさを改めて感じました。そして、私たちと同じような年齢の人やそれよりも小さい子供たちが勉強をさせてもらえず、国のために働いていたということが衝撃でした。原子爆弾によって亡くなった下級生の遺体を校庭で焼いたり、怪我をした生徒の手当てをしたりしていたと聴き、当時の生活と今の生活がどれほど違うかを知ることができました。お話を聴かせていただいた二名の方とも共通して、中学校で英語を学ぶのを楽しみにしていましたが、中学校に入学すると英語の教科書を焼却炉で燃やされ、英語を学ぶことができなかったそうです。英語を学ぶ代わりに当時、主に食べられていた芋を作ったり、工場で働いたりしていたと聴き、私は学校に行って授業を受けたり、家族と一緒に美味しいご飯をたくさん食べたりして、平和に暮らせていることにありがたみや幸せを感じました。

平和記念資料館には、原子爆弾が落ちた当時の様子が詳細にわかる絵や写真がありました。まるで地獄のようでした。火傷だけ

ではなく放射線による被害があったことや、今でも後遺症に悩まされている人がいることを知り、こんなにも恐ろしい核兵器は世界から廃絶するべきだと強く感じました。

今も世界では戦争が起きています。日本もいつ戦争が起こるかわかりません。私は、原爆死没者慰霊碑にも「安らかに眠って下さい 過ちは繰返させぬから」と刻んであるように、七十九年前の悲惨な出来事を再び起こしてはならないと思います。被爆された方も「戦争はもう二度と起こしてほしくない、平和を保ってほしい」とおっしゃっていました。亡くなってしまった人たちが被爆された方のためにも平和を保ち、祈り続けることが私たちがしなければならぬことだと思います。そのために私は二日間、広島で学んだ戦争や原子爆弾の恐ろしさを家族や友だち、身近な人に伝え、より多くの人に知ってもらいたいです。そして、私も含めて一人ひとりが戦争と向き合い、平和な世界を築くためには何をすればいいのかをしっかりと考え、行動していきたいと思えます。そうすれば、誰もが願う平和な世界になるのではないのでしょうか。



平和の大切さと戦争の恐ろしさ

城田中学校 代表者

私たちは、伊勢市代表として、広島で七十九年前に起こったことを学びに行きました。一日目に平和記念公園に行きました。慰霊碑や原爆ドームを見学し、原爆の子の像に各校で折った千羽鶴を献納しました。次に平和記念資料館行って被爆者の切明千枝子さんのお話を聴きました。切明さんのお話で特に印象に残っていることは、原子爆弾で亡くなった人に天ぷら油をまいて学校で焼いていたことです。今まで原子爆弾で亡くなった人の遺体をそのあとどうするのかを考えたことはなかったので、驚きました。他にも、切明さんが中学三年生の頃に、「英語の教科書を持ってこい」と先生から言われ、「英語の勉強ができる！」と嬉しい気持ちで翌日学校へ行くと、「敵の国の言葉だから」とその英語の教科書を焼却炉で焼かれたことや、英語の先生が周囲から「兵隊さんのために農業の先生になれ」と言われていたということもすごく印象に残りました。そのあと、平和記念資料館の展示コーナーへ行き、戦争当時の写真や絵を見ました。私は、当時の状況を詳しくは知らなかったのですが、写真や絵を見てたくさんの方がひどい火傷に苦しんでいたのだなと思いました。他にも兵隊の方の遺書やボロボロになった服などが展示されていました。平和記念資料館では戦争当時の状況を詳しく学習することができました。

二日目は平和記念式典に参加させていただきました。広島市議会議員による式辞、広島市長による平和宣言や、内閣総理大臣、広島県知事、国際連合事務総長によるあいさつを直接聴くことができました。それぞれのお話を聴いて平和に過ごせることがどれほど幸せなことなのかを今まで以上に実感しました。そして、世界にはまだ戦争を行っている国があるからこそ、式辞でもおっしゃっていたように戦争と核兵器のない世界を創造することが重要だと改めて思いました。平和記念式典に参加したあとに青少年平和文化イベントに参加しました。そこでは被爆者の梶本淑子さんのお話を聴きました。戦争で亡くなった人は原子爆弾だけではなく栄養失調も死因の一つであったことや、音楽の授業も英語が使われている歌は聴けなかったことなどを知りました。

今回初めて広島に行き、原爆ドームや慰霊碑を見学し、平和記念式典にも参加させていただけてとても貴重な体験ができました。この二日間の広島で学んだことは戦争の恐ろしさです。原子爆弾によって一瞬で数万人の命がなくなり、ひどい火傷や怪我で苦しむ人や、放射線により数年たってから病気が発覚した人など多くの人に被害が出ていました。このような出来事をまた起こさないために核兵器を廃絶することが大切だと思いました。たくさんの方が戦争についてもっと知ること、私たちも今回広島に行ってきたことを家族、学校の仲間などさまざまな人に伝えていくことが大切だと思いました。

あの日の悲劇

桜浜中学校 代表者

八月五日、私は初めて広島を訪れました。まず最初に原爆の子の像に全校生徒で折った千羽鶴を献納しました。献納する場所は数多くの千羽鶴で埋め尽くされていて、いろいろなところから平和への願いを込めて千羽鶴が届いているのだと感じました。

次に原爆ドームへ行きました。この建物を見て原爆がどれほどの威力があったのかということを知り、この兵器がとても悲惨なものだったのだと思いました。また、原爆の威力のなか、原爆ドームがほとんどそのままの形でよく残ったなとも思いました。そのあと平和記念資料館に行き、切明千枝子さんの被爆証言講話を聴かせていただきました。広島が戦争によって栄えたことや戦場に犬や猫、馬などの動物までもが連れて行かれたという話もありました。原爆が投下され、人々が水を求めたことから平和記念公園には水をもらえずに亡くなった人のために噴水など水がたくさんあるように造られたことなど、当手を想像できるほど細かく教えてもらいました。戦争を体験した人は私が想像したものよりもはるかに恐かったでしょうし、この先どうなるかという不安があったと思います。戦争が終わって七十九年経った今も後遺症に苦しんでいる人がいるということを忘れず、平和を訴え続けていきたいと思います。

一日目の最後は平和記念資料館の展示を見に行きました。資料館では当時の写真や焼けた服などが展示されていて、一発の原爆でそこに住む人々の生活がどのように変わっていったのかということがよく分かり、改めて戦争はしてはいけないと思いました。二日目は、平和記念式典に参加しました。この式典にはいろいろな国からたくさんの方が来ていて広島に対する関心が世界中で高まっていると感じました。私は、こども代表の「平和への誓い」を聴いて鳥肌が立ちました。特に「色鮮やかな日常を守り、平和をつくっていくのは私たちです。」という言葉が一番心に響き、広島の子どものための平和への願いが感じられました。

私が訪れた広島は高いビルが立ち並びつつも緑豊かな町でした。しかし、七十九年前のあの日、広島は町は一瞬にして壊滅し、多くの尊い命が奪われました。今、開発されている核兵器が一気に使われれば地球なんてあっという間に破壊されてしまうほどの威力があります。広島で投下された原爆の何千倍もの威力があり、もし核兵器が落とされたら広島よりももっとたくさん犠牲者が出てしまいます。そんなことにならないように核兵器廃絶や平和を訴えていきます。



恐ろしい思い

桜浜中学校 代表者

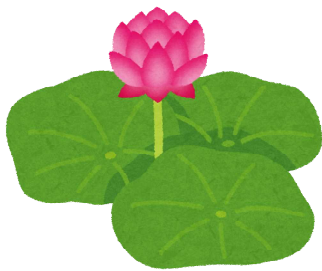
広島に着き、最初に思ったことは「この地に七十九年前に原爆が投下され、多くの人たちが地獄のような思いをし、亡くなったのだ」ということでした。私は広島で悲惨な出来事があったというのを動画やテレビなどでは見たことがありません。「平和学習」という名前で毎年原爆に関する動画を見て、「広島ではこんなことがあったのか」と少し軽い気持ちで見ているところがありました。しかし、実際の建物を見て、動画とは比べものにならないくらいのおどろおどろしい雰囲気を感じました。原爆ドームとは「悲惨な出来事を物語る貴重な建物」というイメージでしたが、この日を境に「悲惨という言葉でしかない人々の辛い出来事の詰まった建物」というイメージにはつきりと変わり、意識することができました。

白血病で若くして亡くなった佐々木禎子さんをはじめ、原爆で亡くなられた方たちへ、平和への思いを込めて千羽鶴を献納しました。戦争のせいで未来を早くに奪われてしまった多くの子どもたちの分も長く生き、「命を大切にしなければ」と強く思いました。それに、今私たちが勉強や運動など好きなことに没頭できる時間は戦争中の人たちからすれば羨ましいと思えることなんだと実感することもできました。

今回、広島に行って特に心に残ったことは被爆した方のお話でした。実際に戦争を経験し、必死に生きようとしていた方のお話は心に深く突き刺さりました。本当なら思い出さなくてもいいようなあの日の出来事を繰り返し話す被爆者の姿からは戦争が本当に恐ろしかったことが伝わってきました。今回聴いた話の内容を十分に感じ取り、戦争はもうあってはならないものだということを心にとめることが大切だと思います。

資料館では動画などで見るものよりもっと生々しい、悲惨な光景があたり一面を埋め尽くしていました。一人ひとりの悲惨な出来事を見ていくたび、恐ろしかったという言葉で頭の中はいっぱいになっていきました。

今回の広島で学んだことは実際にその地に足を運ばなければ感じられなかったことばかりでした。私はこのことを決して忘れず、後世の人たちにこのような思いがあったのだということを伝えていきたいです。



今の自分にできること

五十鈴中学校 代表者

毎日お腹一杯になるまでおいしいごはんを食べられること、命の危機を感じずに生活できること、それらの当たり前前の生活が戦時中は脅かされていました。今回、広島平和事業に参加して、悲惨な過去をより深く知ることができました。特に印象に残っていることが二つあります。

一つめは被爆証言講話の切明千枝子さんのお話です。被爆当時切明さんは十五歳で、爆心地から少し離れた市内の工場で働いていたそうです。切明さんの後輩は広島市の中心部で建物を壊す作業をしていました。原爆が投下された後、切明さんが中心部にあった学校に戻ると地獄のような光景だったそうです。後輩たちに対して手当てできるものがなく、みんなが「死んでもいいから水をくれ」と言い苦しんでいたそうです。水を飲んですぐに亡くなる人もいて、水をあげて後悔したことを聴きました。水を飲まなかった子たちも次々に亡くなっていったそうです。切明さんたち上級生で下級生を火葬する話は、聴いているだけで胸が痛くなりました。そして後輩の死体が火葬されると熱硬直により肉体反応があり、少し動いていたという話は、想像するだけで泣きそうになりました。

二つめは原爆ドームを見学したことです。建物の周囲には多く

のがれきや破片、壊れたブロック塀がありました。また黒焦げた様子も多く見られました。変わり果てた建物の様子を見て、当時の光景を想像しました。原爆ドームだけが七十九年前のあの日のままで、原子爆弾の威力や、残酷さ、悲惨さを物語っているように思いました。一方で周囲に目を向けると原爆ドームよりも大きい近代的な建物が多くありました。平和に発展した広島町の町を見て、より一層平和への願いをもつようになりました。

今回の広島平和事業で学んだことを、今後に生かしていきます。特に「伝えること」、「知ってもらうこと」、「広めること」をしていきます。ピースメツセンジャーとして身の回りの人たちや学校の人たちに、原子爆弾の恐ろしさについて伝えていきたいです。また「平和の大切さ」についても伝え広めていきたいです。そのためには一人でも多くの方が行動を起こす必要があると思います。未来をつくっていくのは平和をめざす人であってほしいです。



平和な社会をめざして

五十鈴中学校 代表者

「平和とは何か」、今回の広島平和事業に参加するにあたって私の中でテーマを考えて臨もうと思った。

私が広島平和事業に参加して一番に残っているのは被爆証言講話だ。被爆者の切明千枝子さんから聞いた当時の様子は、想像以上で当時の様子がありありと伝わってきた。そして、時々言葉を詰まらせている様子を見て胸が苦しくなった。たった一つの原子爆弾で広島は地獄に変わり、見渡す限りの火の海、一瞬にして何万人もの命が失われたことを聴き、様々な感情を抱いた。

当時、私と同じ中学三年生だった切明さんは、爆心地から離れたところで働いていた。しかし、爆心地の近くで家屋の解体作業を手伝っていた後輩たちはみんな全身にやけどを負ってボロボロの状態になってしまった。切明さんは後輩たちの手当てを行っていたが、後輩たちはみんな口々に「水をちょうだい」と言っていた。水を飲むと死んでしまう子たちもたくさんいたが、そうなる分かっていながらも苦しむ後輩の様子を見かねて水をあげてしまった人もいたそうだ。ただ、一方で水を飲むと死ぬかもしれないため、水をあげられなかった切明さんは最後に水くらいあげればよかったと後悔しているという話から、当時の惨状がとても伝わってきて苦しくなってしまった。そして改めて突然たくさん命を

奪ってしまう原子爆弾の恐ろしさを感じた。

「燃えながら泣きながら母校へたどりつき果てたる友よ八月六日」これは切明さんが当時のことを詠んだものだ。後輩たちが学校に帰ってきたものの、後輩全員が亡くなった話、その後輩の死体を校庭に埋めた話、そしてその死体を火葬した話、全てが衝撃だった。それでも被爆者たちは、生き残った命を無駄にはしないと生き続けている。私も被爆者の方のように強く生きなければいけないと思った。

私は、これからピースメッセンジャーとしてより多くの人に今回の被爆証言講話で学んだことを伝えていきたい。特に切明さんのような当時を知る語り部は年々減っている。そのような状況だからこそ話を聞いた私たちがそのバトンをつないでいかなければならないと思っている。

平和とは誰もが安心・安全で楽しく当たり前の生活を送れることだと思う。日々の生活を大切にして、みんなで少しずつ平和にしていく。そんな平和な世界をつくりたいと思っている。



ヒロシマの悲劇を忘れないように

二見中学校 代表者

私は、今まで広島に行ったことがありませんでした。そのため学校や資料でしか原爆について触れることがなく、広島で何があったかなどを詳しく知りませんでした。しかし、今回ピースメツセンジャーとしての活動を通して原爆のことを深く濃く知ることができ、とても貴重な経験ができました。特に印象に残っていることが二つあります。

一つめは、被爆証言講話についてです。切明千枝子さんのお話を聴かせてもらって、被爆者でないといけない悲しみや苦しみ、つらさを肌で感じ、聴いているだけで涙が出そうになりました。千枝子さんは講話の最後に、「原爆で死んでいった数知れない子どもたちを一人ひとり、心の中で生き返らせてあげてほしい」「一緒に生きてあげてほしい」とおっしゃっていました。これを聴いた時に、「このことは絶対に忘れてはいけないな、こういうことを周りの人に伝えていくことが大切なんだな」と感じました。

二つめは、平和記念資料館についてです。資料館で初めて被爆者の遺品を見ました。穴だらけでボロボロの服や帽子を本当にその時、その人が着ていたんだと思うとすごく怖くてぞつとしました。真っ黒になった水筒や子ども用の三輪車などを見ると、原爆がいかに広島の人たちの日常生活を残酷に奪ったかということが

目に浮かび胸が痛みました。また、原爆が炸裂した瞬間や原爆が投下された後の町、焼失せずに残った病院での治療の様子などさまざまな写真や絵が多数展示されていました。中には衝撃的なものも多く、これが現実起きたものかと考えさせられました。資料館には他にも多くの遺品が展示してありました。そしてそれを見た時に「もうこんな悲劇が起きないようにしてね」と言われているような気がしました。その感覚は今でも覚えています。

二日間の経験を通して私が一番思ったことは、約八十年前の八月六日に広島で起きた悲劇を他人事として考えないということだと思います。若い人は特に、恐いというのもあり自然と原爆のことを遠ざけてしまう人も多いと思います。私もその中の一人でした。しかし、遠ざけてばかりいると、どんどん戦争のことを知っている人が少なくなってしまうます。まず、自分で原爆のことを調べてみたり、家族と話してみたりするところから始めるのも良いと思います。そして、実際に広島を訪れることでよりこの悲劇を繰り返してはいけないと感じると思います。その気持ちを心に持ち続けて、後世に語り継いでいかなければいけません。未来から見ても、今現在が「戦前」と言われないうちに私たちが考え、後世のために行動していくことで、将来がより良い方向に進むと思います。



広島を訪れて

二見中学校 代表者

私が広島へ実際に行って感じたことは三つあります。

一つめは、遺品に込められた思いです。私は平和記念資料館にあるのは被爆者の方々の服や絵だけだと思っていましたが、実際はそれだけでなく、原爆の恐ろしさが一目でわかるような三輪車やお弁当箱、八月五日で止まっている日記、焼け野原になった広島の写真などがたくさんあって、自分の頭の中で小さな子どもが三輪車に乗っている姿や少年がお弁当を食べている様子などを想像するととても心が痛みました。そして展示されているものいくつかには近くにその被爆者の遺族の方のメッセージやその人などのような人だったのか、原爆が投下される直前までどのようなことをしていたのかが書かれていて遺品一つひとつにその方への感謝の気持ちや亡くなってしまった悲しみが込められていることを感じました。

二つめは、原爆の恐ろしさです。私は小学生の時に「はだしのゲン」という原爆に関連する作品を何度も読んだので、原爆が投下された時人々にどのような影響があったのか、わかっていたつもりでしたが、資料館で見た実際の写真や遺品や絵を見ると自分は原爆の恐ろしさをほんの少ししかわかっていなかったと感じました。資料館にあった写真の中に、原爆の放射線による後遺症で

苦しんでいる人の写真や、食べるものがなくて痩せ細っている人々の写真がありました。それを見て原爆による被害は爆発した時に発生する熱風やそれにより吹き飛ぶガラスの破片などだけではなく、放射線による後遺症やその後の食料不足などがあり、やはり原爆は二度と使用されてはいけない兵器であると改めて知ることができました。当たり前の生活はいつどのタイミングで奪われるかわからないと知り、これから苦手なことがあっても全力で取り組み、日頃から感謝の気持ちを伝え、当たり前の生活を大切にしたいと思いました。

三つめは、生き残った人々のつらさです。今回、当時十五歳で被爆された方のお話を聴かせていただきました。両親の安否を確認できていないまま、死体を燃やす作業や怪我人の手当てをしなければいけなかったと聴き、私にはできないと思いました。当時の生き残った人々のつらさ、行動を思い心を打たれました。

私は今回広島を訪れて、原爆についてこれから知らない人たちに広島のことを知って欲しいと思いました。被爆者の方々はもうほとんど亡くなられていて、生きている方も高齢の方が多く、日本中のあちこちへ行って話をするのは大変です。そこで私たちがしっかりと平和について学び次の世代へ繋いで、もう二度と原爆が投下されない世界をつくらなければいけません。私も今回広島で感じたことを周りの友だちや家族に伝えて、少しでも原爆について知ってもらうきっかけにしたいと思いました。

平和を掴むために

小俣中学校 代表者

八月五日に広島へ行き、まず、平和記念公園で、原爆死没者慰霊碑の見学をしました。この慰霊碑は、原爆犠牲者の霊を慰めるために造られました。石棺の正面に、「安らかに眠って下さい 過ちは繰返しませぬから」と刻まれていました。もう二度と戦争を繰り返さないという約束を示しているのだと思いました。そして、千羽鶴を原爆の子の像へ献納した時には、小俣中学校の生徒全員で作り上げた、みんなの平和への思いを広島へ届けられたと思いました。

原爆ドームでは、実際にビルが倒壊したようにレンガのようなものが散らばっていました。平和記念資料館の見学では、被爆者の体験談をまとめた詩や短歌、日記、全身やけどを負いながら子どもを抱えて逃げる母親の姿を描いた絵、埋める場所がなくて放置されているたくさんの骸骨の写真など、見るのもつらいものごとくたくさん展示されていました。当時の実物や写真を実際に見ることとで、テレビなどの映像からでは伝わらない戦争の悲惨さや恐ろしさを改めて実感しました。

特に印象に残ったのは、被爆証言者の切明千枝子さんのお話です。切明さんは現在九十四歳、今の僕たちと同じ十五歳の時に被爆しました。切明さんは、子どもの頃の暮らしや、被爆当時のこ

とを語って下さいました。切明さんが小学生の頃に日中戦争が始まり、やがて世界大戦になっていったそうです。中学校に入学したころには、戦争の影響で授業もなくなり、工場で働くようになりました。被爆した日の様子や平和記念公園の前にある噴水の意味を教えてくださり、自分と同じくらいの年頃の人が多く犠牲となっていて、今、平和に暮らせている世の中が当たり前ではないことを実感しました。

切明さんの言葉に、「平和を掴んで離さないで下さい」というものがありました。「気を付けないと平和でなくなるから、絶対に気をつけて」という思いがこもっていると僕は感じました。

そして、翌日には広島平和記念式典に参加しました。そこで、核兵器廃絶や平和の大切さを再確認しました。戦争から八十年近く経とうとしている中、今もなお行方不明者がいます。式典で黙とうをしているとき、切明さんの言葉を思い出し「多くの人が犠牲になった戦争を二度と起こしてはならない」と強く思いました。今、ロシアによるウクライナ侵攻の長期化や、中東での紛争が起こっています。また世界では、核による威嚇が行われています。決して第三次世界大戦に発展してはならないと思います。それを防ぐためにも、戦争のことを全く知らない世代である人々へ、私たちピースメツセンジャーが、戦争の恐ろしさや平和の大切さを語り継いでいく必要があると思います。そして後世に伝えていきたいです。

平和の尊さ

小俣中学校 代表者

私は、八月六日に行われた広島平和記念式典に参加しました。そこでは、原爆死没者名簿奉納や平和宣言、平和への誓いに続いて、原爆が落とされた時刻の八時十五分に黙とうを行い、平和の尊さを身に染みて感じる事ができました。

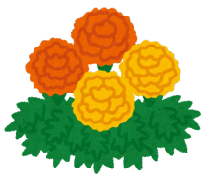
式典の前日、広島平和記念資料館の見学では、展示物を見て、原爆による被害、苦しみ、恐ろしさを肌で感じ、町や人は地獄のような光景になってしまふのだと強く思いました。原爆というのは、平和な色鮮やかな日常を一瞬にして地獄のような姿に変えてしまふ、恐ろしいものだとか分かってはいたものの、これだけたくさん被害を出し、夢や希望に満ち溢れていた多くの若い人たちの命を奪う、本当に悲惨で、恐いものだと分かりました。同時に、なぜこんなものが世の中にできてしまったのかと、とても憤りを感じました。

被爆証言講話を聴くことができ、被爆者である切明千枝子さんは当時十五歳で、爆心地からおよそ一・九キロメートルの所で被爆しました。切明さんは、当時の広島を「地獄だった」とおっしゃっていました。また、「中学生や女学生の体が焼けて、皮がむけた状態になって、『水をくれ』と同じことを何度も繰り返し私に言ってきました。水をあげると体の熱と水で心臓がショックを起こ

して死んでしまうため、どうしてもあげることができず、本当に悲しかったのですよ」ともおっしゃっていました。話を聴き、ただ見守るだけというのが、どれほど悲しくてつらいものなのかを肌で感じてきました。もし自分が切明さんと同じ状況だったならば、耐えられないほどの苦しみに押し潰されていたかもしれないと思いました。当時の壮絶な状況が思い浮かび、とてもつらくなりました。

最後に、切明さんがこのようなことをおっしゃっていました。「歩いてきたところの下にはまだ骨が埋もれているかもしれない。私はそう感じている。だから、その子たちのことを思ってあげてほしい。生きたくても生きられなかった日々を君たちが共に生きてやってほしい。だから、簡単に死なないで。人生のうちにつらいこと、悲しいことがあると思う。でも、自分の一つの大切な命、大事にしてやってください。あの子たちのことを思って生きてください。それだけが唯一の願いです。」

この言葉を聴き、自殺が多いこの現代社会において、切明さんの話はまだまだ人生の長い私たちに向けた思いなのではないかと感じ、とても考えさせられる言葉だと受け止めました。また、原爆のため亡くなった多くの人の分まで、自分は強く生きなければならぬ、本当に強く思いました。



原爆が投下された後にある悲惨な出来事

御園中学校 代表者

私が広島で過ごした二日間の中で一番心に残っていることは、被爆証言講話をしてくださった切明千枝子さんのお話です。

切明さんは当時十五歳で、工場に勤めていたそうです。原爆投下時には、爆風で割れて吹き飛んで来た窓ガラスで怪我をしたそうです。そして、生き残った人たちが学校に避難しました。そこには被爆した後輩が運ばれてきて、爆心地に近かったため全身真っ赤に火傷を負っていました。しかし、患者の数が多く医者・薬が足りなかったので十分に火傷の手当てができず、応急処置として体に天ぷら油を塗るよう先生に指示されたそうです。後輩は水を欲しがっていたので、切明さんは水をあげようとしたのですが、医者に「全身火傷しているから水をあげてはいけません。水を飲んだら死んでしまいます」と言われたため、切明さんは後輩のために水を飲ませてあげられなかったそうです。それでも後輩は「死んでもいいから水が欲しい」と水を求めたので、飲ませた人もいたそうです。また、切明さんは、死んでしまった人のために薪を拾いに行き、自分たちで火葬し、泣きながら骨を拾い、校庭に穴を掘って埋葬したそうです。切明さんも悩んでおりましたが、「死ぬかもしれないけど、本人のために水をあげること」か「死んで欲しくないの、苦しいかもしれないけど水をあげないこと」

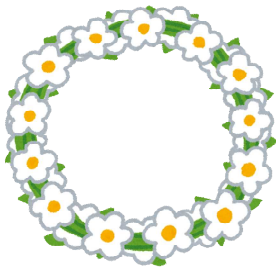
のどちらの選択が正しいのか私にはわかりませんでした。

切明さんは話の最後に「今歩いている広島島の地面の下には骨が埋まっているかもしれません。心の中で『ごめんね』と思って歩いてください。そうすると、みなさんの心の中で生かさせてあげられます。一緒に生きてあげて下さい。」と言いました。その言葉が心に残っています。

話を聞いた次の日、平和記念式典への移動の際に、切明さんの言葉を思い出し、昨日と違い自然と考えて歩くようになりました。とても複雑な気持ちでした。

教科書に載っていない内容の話を聴いたり、原爆ドームを見たり、実際にその場に足を踏み入れたりして感じた、何ともいい表せない感情を、私は一生忘れません。そしてこの気持ちを、まだ戦争について知らない人たちに伝えていかなければいけないと思いました。

願うだけでは平和は訪れません。家族や友だちと平和の尊さや命の重みについて語っていくことが重要で、平和への一歩なのだと学ぶことができました。



過去の広島から考え、未来へつなぐ

御園中学校 代表者

ピースメッセンジャーとして広島を訪問して一番印象に残っていることは、切明千枝子さんの被爆証言講話を聴かせていただいたことです。初めは広島のを歩くとき、何も考えずに歩いていました。しかし、切明さんのお話で「今でも広島はどこかに原爆で命を落とした人の死体が埋まっている。その人たちを一人ひとりの心の中で生き返らせてあげてほしい。一緒に生きてあげてほしい」と言われ、一步一步を深く考えながら歩くようになりました。

当時、「水をくれ」と叫ぶ人がたくさんいたのですが「水を一口でも飲めばショックで死んでしまうから水は絶対あげるな」と切明さんは教えられたそうです。水を飲ませてあげても、飲ませてあげられなくても、ほとんどの人は死んでしまったそうです。もし、水を求められたとき「私ならどうするか」と考えました。きつと飲ませていたと思います。そして、その人が亡くなってしまうたら、私は一生、水を飲ませたことの罪悪感をもち、とてもつらくなるのではないかと思います。

広島に原爆が投下された後、全身に火傷を負った人、内臓などが飛び出している人、剥がれた皮膚を引きずりながら歩く人、叫んでいる人がいて、町は吹き飛ばされ焼け野原となり、地獄のよ

うな光景だったそうです。私は火傷をし、とても痛かった経験があります。しかし、全身に火傷を負った経験はありません。当時、全身に火傷を負い皮膚が剥がれ落ちている状態でも、治す薬はなく、医者もいなかった状況でとても痛く苦しかったと思います。

平和記念公園にある噴水は、「水をくれ」と、うめき叫びながら死んでいった人へ水を捧げてご冥福を祈り、世界恒久平和への願いと慰霊の気持ちを込め、建設されたそうです。これを聴き私は亡くなってしまった人へご冥福をお祈りし、核兵器廃絶へ向け、私たちにできることは何かと考えました。忘れられたことは再び繰り返されます。だからこそ、このような出来事が二度と起こらないよう、私たちが学び聞いたこと、そして感じたことを周りの人々に伝えていくことだと思います。「戦争」や「核兵器を使うこと」によってもたらされる、悲惨さ、苦しみ、悲しみ、つらさを理解し、自分たちで平和をしっかり守っていきます。

私は初めて平和記念公園を訪れ、平和記念式典に参加しました。外国の方々や子どもから大人まで、たくさんの方々を訪れているのを見て、世界中の人々が平和を願っていると感じました。また、当時のまま残る原爆ドームや資料館の遺品、当時の様子を伝える写真や絵を見て原爆が投下された状況や、その後の広島光景が目の前に広がっているように感じました。今の広島は草木が生え建物が立ち並び大勢の人々が賑わっています。私はこのような平和をずっと守り続け、核兵器廃絶を実現したいです。

抑止力に頼らない本当の平和

倉田山中学校 代表者

私は、八月五日、初めて広島に行きました。原子爆弾の爆心地の当時の様子や、平和の大切さについて、資料館や被爆体験講話から学びました。

はじめに、平和記念公園に行き、学校で作った折り鶴を献納してきました。そこには、日本だけでなく世界中から折り鶴が捧げられていました。世界中で平和を願う思いは共通しているのだと感じました。その後、原爆ドームを訪れました。原子爆弾の威力がどれほどのものだったのかを間近で見ると胸が痛くなりました。

その後、被爆者の切明千枝子さんのお話を聴かせていただきました。当時、切明さんは中学校三年生でした。切明さんは被爆してすぐに全身をやけどしている人を学校の教室に運びこみ、応急手当てをしていました。けが人は全員「水が欲しい」と言っていたようです。医者からは「水をあげるとショックで死んでしまうから絶対に水をあげてはいけない」と言われていました。しかし、何度も何度も「水をくれ」と言われ、切明さんの友だちは水を飲ませました。すると、水を飲んだ人は亡くなってしまいました。その友だちは自分のせいで殺してしまったと大変後悔していたそうです。しかし、水を渡さなかった切明さんは死んでしまう前に水をあげたら良かったと後悔したそうです。このような思いを一

生背負って生きていくことはとてもなくつらいと思います。戦争は目に見えない心の奥まで大きい被害を残す残酷なものであると感じました。

平和記念式典は厳粛な雰囲気のもと執り行われました。初めのほうで行われた献水は市内十七か所から集められた清水を、水を求めて亡くなっていった被爆者へ捧げるものでした。

この式典でスピーチをしていた人の話を聴いて、私は、「ウクライナやガザ地区の出来事をはじめこの世界は平和への道を進むどころか、戦争へ逆もどりしている」と思いました。そして、切明さんのお話から、当時、敵国を侮蔑し、戦争をすることは正しいことであるという風潮があったそうです。今、世界に目を向けると中東やウクライナ、アフリカなどで実際に戦争や紛争が続いています。国は人の集まりです。だからこそ一人ひとりが相手を尊重し互いに歩み寄れば戦争のような行き過ぎた対立は起こらないと思います。

今回、参加したことで、原子爆弾の悲惨さを学び、このような出来事を繰り返してはいけなないと思えました。核兵器は抑止力として、この世界にたくさん存在しています。日本もその抑止力によって守られているのかもしれませんが、しかし、核兵器がないと担保されない平和は真の平和ではないと思えます。だからこそ、核のない本当の平和な世界にできるように一人ひとりが平和を心がけていくことが大切だと思います。

平和とこれからの世界

倉田山中学校 代表者

八月五日に、私は初めて広島を訪れました。七十九年前のこの日に広島で何があったのか、平和とは一体何なのかということに学ぶためです。

まず初めに広島平和記念公園へ行き、折り鶴を献納して、慰霊碑や原爆ドームの見学をしました。

次に被爆証言講話を、切明千枝子さんから聴かせてもらいました。切明さんは「広島を歩くときは足元を見て考えながら歩いてほしい」とおっしゃっていました。なぜなら、原爆などで亡くなった人の骨がたくさん埋まっているからだそうです。今では考えられませんが、当時はたくさんの方が亡くなられて全ての骨を拾って、余裕もなく、ほとんどが埋められてしまったそうです。私はそれを聴いて、つい先ほどまで何となく歩いてきた広島の地に、そんなことがあったのかと改めて原爆の恐ろしさを実感しました。また、「戦争が廊下の奥に立っていた」という言葉があります。これは、渡辺白泉という人が詠んだ俳句です。「もう二度と戦争が廊下の奥から出てこないようにする。それこそが平和だ」という意味で、戦争が二度と起こらないようにすることがまず大事なんだなと思いました。

被爆証言講話を聴いた後は、平和記念資料館でさまざまな展示

物を見学しました。資料館には当時の広島の状況などがわかる物がたくさん展示されており、中には生々しいものもあり、当時の状況が詳しくわかりました。

二日目の平和記念式典では、広島市議会議長や広島市長、子ども代表や内閣総理大臣などさまざまな人のお話を聴きました。その中で私が特に印象に残ったお話が二つあります。

一つめは広島市長による平和宣言で、「争いをなくすには、音楽や美術、スポーツなどを通じた交流によって他者の経験や価値観を共有し合うことが重要」ということです。これは私たちにもできる身近なことだと思っているので、このようなことから、「世界平和」に一步近づけるよう行動していきたいです。

二つめは広島県知事の挨拶の中の「核廃絶は遠くに掲げる理想ではない。今、必死に取り組まなければならない、人類存続に関わる差し迫った現実問題である」ということです。核兵器廃絶は、自分たちには関係のないことではなく、一人ひとりが考えなければならぬことであるということを感じたからです。

今回の広島訪問で、戦争は過去の話ではなく、今もどこかで起こっていて、苦しんでいる人がいるということを改めて強く実感しました。そして、今後どのように行動していくべきかを考え、この二日間で学んだことを戦争のない、平和な世界にするためにさまざまな人に伝えるとともに、私自身も行動していきたいです。

過去から学び未来へ繋ぐ

厚生中学校 代表者

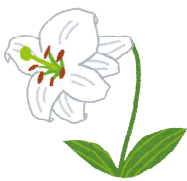
今回、平和記念式典に参加するにあたり、私は初めて広島を訪れました。テレビの画面ではなく実際に見て聴いた話は私にとって全てが刺激的で良い経験となりました。

私が二日間で特に印象に残ったのは、一日目の被爆証言講話です。講師の九十四歳の切明千枝子さんは、二度と同じことが起きないように、当時のことを話してくださいました。そのお話は、とても生々しく、重く、悲しかったです。その中でも驚いたのは、死体の処理のお話です。死体は集められ、学校の校庭で生徒たちの手によって燃やされたそうです。そのことを聞いて本当に恐くなりました。燃やされた骨は、校庭にそのまま埋められ、今もお眠っています。このことについて切明さんは、「少しでも亡くなったあの子たちのことを思ってやってください。そして、あの子たちを心の中で生かしてやってください」と何度も何度も強くおっしゃっていました。私は、話を聴くことができて良かったと強く思いました。また、切明さんは、「広島の地面の下にはたくさんのお骨が埋まっているから、そのことも考えて広島を歩いてほしい」ともおっしゃっていました。この言葉を聴いた前後では考え方が大きく変わりました。生きたくても生きられなかった人や苦しんで亡くなられた人たちのことを私たちが踏んでいると思

うととても悲しく、申し訳ない気持ちになりました。もう二度と同じことを繰り返してはならないと強く感じました。このことは、他の人にも伝えたい、伝えなければならないと思いました。

そして、私の中で衝撃を受けたのは平和記念資料館です。そこには、当時の写真や絵、遺留品などが展示されていました。血だらけの人々、地獄のような絵、ボロボロになった服、遺留品とともに悲しいエピソードも書かれていました。テレビや教科書では感じることでできない残酷さを何度も目の当たりにし、本当に悲しく恐く感じました。その中でも、私が気づいたのは当時の食料の少なさです。資料館には私たちと同じ一四歳、十五歳の被爆者の衣服がたくさん展示してありました。その衣服の大きさは、今の中学生と同じ年齢の子どものもだとは思えないくらい小さく感じました。これを見て、当時、ご飯が十分ではなかったことを思い知らされました。資料館で見たことは、決して忘れることはないと思います。

この二日間で見たこと、聴いたこと、学んだことは生涯私にとって忘れられない良い経験となりました。私が平和のためにできることは、広島で学んだことをたくさんの人々に伝え、繋いでいくことだと思います。今回学んだことを、未来へ繋いでいきたいです。



これからのためにも

厚生中学校 代表者

八月五日、六日に伊勢市のピースメッセセンターとして、七十九年前の広島に何が起こったのかを学び、それを後世へ伝えるために広島を訪問しました。広島平和記念式典に参加したことや平和記念資料館を訪問したことで、戦争の悲惨さや平和の重要性について再認識することができたことや、被爆者の方からの当時の詳しいお話を聴いて感じたことを述べたいと思います。

平和記念資料館を訪れた際、数多くの展示物や資料を見て恐怖という感情が湧き上がりました。人の影が残った壁、焦げた弁当箱、ひしゃげた自転車、それらからは、教科書などでは感じることのできない核兵器の恐ろしさを感じました。一つひとつのものや写真には、実際の痛みや苦しみが込められているような気がして、当時の重い現実が一瞬で心に迫ってきました。

広島平和記念式典は、毎年八月六日に広島市で行われ、世界中から人々が集まり、原爆の犠牲者を追悼し、平和の大切さを再認識する式典です。式典中は終始厳かな雰囲気漂っており、内閣総理大臣の岸田総理や広島市長らが、眠っている被爆者や親族へ思いをお伝えになりました。私の心の中には言葉では言い表せない思いが込み上げてきました。人々の生きた証が、戦争という愚かな選択によって失われたことを知り、胸が締め付けられました。

特に心に残っているのは、被爆者の方が「この経験を語り継ぐことが私たちの使命で、亡くなった人たちの思いは今でも私たちの心に生き続けている」とおっしゃっていたことです。その言葉には、戦争の悲劇を繰り返さないために自分たちが何をすべきかを、自らの体験をもとに語られる力強さがありました。そして、彼女が語る中で私が感じたのは単なる悲しみだけでなく、強い希望のようなものです。その姿勢に感銘を受け、私もまたこのメッセージを次世代へ届けたいとより一層感じました。

この経験を通して「戦争は何をもたらすのか」について改めて考えさせられました。戦争は、物理的な破壊だけでなく、人々の心に深い傷を残します。その痛みは、時間が経っても癒えることにはないでしょう。私たちができることは、その教訓をしっかり心に刻み、戦争の歴史を忘れないことだと思います。そのためには私たち一人ひとりが声を上げ、平和の大切さを広めていくことが重要です。この経験は私にとって非常に貴重なものとなりました。原爆の恐ろしさはもちろん、平和の大切さも学ぶことができました。ことに感謝し、これらの経験を無駄にせず、私はこれからも平和の尊さを伝える使命を果たしたいと強く思います。個々の悲しい体験からの学びが脈々と受け継がれ、平和への願いが広がっていくことが、次世代に向けた大切な道標になることを信じています。

戦争が奪ったもの

伊勢宮川中学校 代表者

広島駅に着いた私たちの目の前には、戦争を全く感じさせないような平和な町並みが広がっていました。今の広島は、七十九年前に原爆が投下され、たくさんの人が命を失った町とは考えられませんでした。

広島で私たちは二人の方から被爆証言講話を聞くことができました。そのお一人は、私たちと同じ中学三年生の時に被爆した切明千枝子さんと、原爆が投下された時に軒下にいたため助かったそうです。しかし、下級生は市の中心地の屋外で働いていたため、全員が深い全身火傷を負い、激しい痛みで耐えながら亡くなってしまったそうです。私たちよりも若い歳の子たちも戦争の恐怖に毎日怯え、勉強がしたかったはずなのに許されず、痛みで耐えながら亡くなったというお話を聴くと、言葉では言い表せない気持ちになりました。原爆が投下され、終戦後も原爆症に苦しむ人が後を絶たず、血液の病気やがんに悩まされて亡くなっていった方たちもたくさんいます。

また、戦争ではさまざまな「自由」を禁止されていました。今では当たり前前の英語を話すことや洋楽を聴くことが、当時はできませんでした。また、戦争によって食料が減り、お腹いっぱい食べたり、家族や友だちと話し、楽しく食べたりすることができな

かったということを考えると心が痛くなります。

十五、十六歳の男子のなかで少年航空隊という特攻隊に志願し、特攻隊として亡くなった方がたくさんいます。戦闘機に乗り、そのまま他国の軍艦や軍隊に爆弾を乗せて突っ込むというものです。しかし、小さな飛行機では大きな軍艦を壊すことができませんでした。私と同じくらいの歳の男子が自ら死を選択するということを聞いた時、思わず恐さを感じました。誰だって生きたいと思うはずなのに、お国のために死を選ぶ人がいる、そんな恐ろしい世の中だったんだと思いました。

今、戦争の恐ろしさを話すことができる方々は、どんどん少なくなってきました。それに伴って、戦争の恐ろしさを身近に感じられない人たちがどんどん増えてきています。今、私たちができることは、戦争の恐ろしさを伝えていくことだと思います。二度と戦争が起こらないように、歴史を繰り返さないように、全員が平和について考えて、平和な世界になれば良いと思いました。



話してくれた勇氣を無駄にしないように

伊勢宮川中学校 代表者

私は今回伊勢市の代表として広島に行きました。広島平和記念式典への参加や、資料館見学、被爆証言講話、原爆ドーム見学などさまざまな経験をさせていただきました。実際に見たり聴いたりして、戦争の悲惨さや苦しさ、戦争後にも体や心に残る痛みなど、たくさんを知ることができました。特に、切明千枝子さんの被爆証言講話を聴き、実際その時どんな思いだったのかを知り、想像を超える悲惨さを知ることができました。その中で特に二つのことが印象に残っています。

一つめは被爆してすぐのお話です。体が飛ばされるような原爆の爆風に襲われ、ガラスが体中に刺さったそうですが、切明さんが、「私の怪我はまだマシな方だったと思います」と話した時、私は驚きが隠せませんでした。普通ならガラスが体に刺さることでさえ大変で痛かったと思うのに、それが軽い方だと聴いた時、想像できないほど悲惨な現場だったんだと感じました。他にも切明さんの周りには、体の皮がめくれ爪のところでひつついてぶら下がっている人もいたと聴き、とても衝撃を受けました。私は血が苦手で、血を見るだけでも貧血を起こしてしまうほどなので全く想像もできません。今回、私たちに当時の話をしてくれましたが、本当は切明さんも思い出さたくないだろうと思いました。それな

のに私たちのために思い出し、それを伝えようとして下さったので、このことは決して無駄にはできない、後世に伝えていかなければならないと強く感じました。

二つめは切明さんが被爆してから数日後のお話です。被爆してから助けられそうな人は病院や学校に運び、応急手当ををし、空いているところに寝かせていたそうです。大勢の人が怪我をしていたので薬なども到底足りず、火傷したところが空気に触れないよう、食用油の残りを体に塗って痛みを和らげることしかできなかったそうです。その時、切明さんは「水をくれ」と何度も頼まれたそうです。水を飲ませてあげたかったのですが、みんな大火傷を負っていたので、「水を飲ませると死んでしまうから飲ませるな」と言われ、死んで欲しくないという気持ちから水を飲ませてあげられなかったそうです。しかし、数日後には、その人は亡くなりました。切明さんは「最期くらい水をあげたら良かった」と今でも後悔しているそうです。逆に他の方でこっさり水を飲ませた人もいたそうですが、水を飲んだ瞬間、「ありがとう」と言って、その人は亡くなられたそうです。水を飲ませた人も「私が水を飲ませたせいで死なせてしまった」と後悔しているというお話も聴きました。他にも切明さんは、地獄のように悲惨な様子や苦しみを私たちに話してくださいました。この思いを無駄にしないように、学校で戦争について実際起きたことを伝え、今後の平和のために理解をより深めていきたいです。